

6 栄 養 学 的 研 究

部 会 長

弘前大学医学部

木 村 恒

本年度栄養学的研究部門では、1. 栄養に関する基礎的研究、2. 栄養に関する調査研究、3. 栄養改善に関する研究の3つを重点的に進めたのでテーマ別にその成果の概略を述べる。

1. 国立栄養研究所(山口・田村ら)は、ビタミンE欠乏モルモットによる筋ジストロフィー発現過程の代謝異常について前年度より研究をはじめ、本年度はジストロフィーマウスに栄養性筋ジストロフィーの発現要因(ビタミンE欠乏)が、著しく寿命を縮めるような特異的マイナス効果のあることを明らかにした。

徳島大学(新山・大中ら)は、PMD患者の3メチルヒスチジン(3MH)尿中排泄量が健常者より高い傾向にあり、年齢が進むほど排泄量が減少し、3MH排泄量とクレアチニン排泄量との間に有意な相関のあることを明らかにした。また患者の基礎代謝(BMR)とN出納を調べ、年長患者のBMRが亢進しておりカロリー必要量も高いことをつきとめた。そしてN平衡維持のための蛋白質摂取量を 1.3 g/Kg/day 以上と定めた。

新山は弘前大の協力をもとに筋疾患の筋肉中のクレアチン受容体の存在を追求するため、まず活性を求めるに必要なクレアチンとクレアチニンをAmberlite IR-120でpHを調整し両者を分離することに成功した。

弘前大学(北・木村)はPMD患者の血漿蛋白20分画を詳細に検討し、健常者に比べてAlbumin, Gc, globulin, Macroglobulin, Transferrin, Ig-Gがそれぞれ有意に低く特に夏期に低下し、患者の防衛体力が季節的影響を受けることを認めた。

2. 弘前大学(木村)はPMD施設の協力を得てPMD患者の栄養性貧血の実態を調査した結果は次のようであった。イ) 15才まで 15.7%、16才以上 24.4%と年長で重症化するほど貧血が増加する。ロ) 患者の血色素量、ヘマトリット値、赤血球数の間に各々有意な相関関係を認めたので、それぞれ年齢を考慮して回帰直線を示した。ハ) PMD貧血者は低体重、低蛋白栄養状態の傾向を呈していた。次に本症患者の至適体位を追求し、保健管理を充実するのに、Duchenne型男子836例について、体重、肺活量、CPK、障害度、Hb、血清蛋白の年齢別動向と平均 σ 値を算出して要注意のチェックに利用する指標を提唱した。

3. 国立療養所西別府病院(城戸・浅井ら)は、るい瘦PMD患者に中鎖脂肪添加粉乳を食間に投与して、体重減少防止効果のあることを確かめ、同時に血清脂質への影響の少ないことも明らかにした。

国立療養所南九州病院(山口・宮田ら)は、るい瘦患者のるい瘦原因のうち、嗜好調査により和風献立が洋風献立より摂取量が少ないこと、間食は18時1回より15時と18時の2回の方が摂取量の低下するを見い出し、施設における給食の改善を強調した。

国立岩木療養所（山田・高柳ら）は、患者に一般病人食と小児食とを別々に与え小児食の方が栄養摂取量が増加すると推察した。

国立療養所東埼玉病院（大島・小林ら）は、肥満患者の体重減量法として主食のみ減少させ、その効果を検討中である。

弘前大学（木村）、国立岩木療養所（森山）は、本症患者に便秘する者が著しく多い（60%）のに注目し、その原因を究明するとともに、日常病院食に朝食後コップ1杯の水、昼食後牛乳100 mlとリンゴ $\frac{1}{4}$ コ、夕食後コップ1杯の水とミカン1個を与えることで便通効果がある程度期待できることを実証した。

国立徳島療養所（新居・山上ら）は、患者の給食の改善に嗜好考慮した食事を与えることにより、カロリー20%、蛋白質33%の摂取量をそれぞれ増加させた。

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

本年度栄養学的研究部門では、1. 栄養に関する基礎的研究、2. 栄養に関する調査研究、3. 栄養改善に関する研究の3つを重点的に進めたのでテーマ別にその成果の概略を述べる。

1. 国立栄養研究所(山口・田村ら)は、ビタミンE 欠乏モルモットによる筋ジストロフィー発現過程の代謝異常について前年度より研究をはじめ、本年度はジストロフィーマウスに栄養性筋ジストロフィーの発現要因(ビタミンE 欠乏)が、著しく寿命を縮めるような特異的マイナス効果のあることを明らかにした。